

【ポスターセッション】

ホームヘルパーの自己成長感に関連する要因

—個別ケアの実践度に焦点をあてて—

○ 関西福祉科学大学 氏名 広瀬美千代 (005275)

キーワード3つ：ホームヘルパー・自己成長感・個別ケア

1. 研究目的

①介護保険サービス事業所で働く介護職は約半数以上のものが仕事のやりがいを感じているが、働く上での悩みは人手、賃金、休暇といった職場の理由の次に、「精神的にきつい」「社会的評価が低い」「夜間に何が起こるかわからない」といった項目が多い。このようなストレスフルな業務状況において、ホームヘルパーはより利用者との関係に困難を抱きながらも、利用者が求めていることを理解し、そのニーズに応える個別的なケアを担うことが求められる。

②先行研究においては、対人援助にあたる専門職の学びやアイデンティティが仕事を遂行することに貢献する力となることが示唆されている。

③介護職の仕事継続の要因は職場としての条件より、それに対して満足しているか、肯定的な側面を見出せているかといった価値的側面を探求することが求められる。特にどのような状況であっても学びや成長を感じることができるかといった視座が重要である。

以上のことを背景として本研究ではホームヘルパーが業務上起こりうる事象に対しても肯定的な指標として自己の学びや成長を取り上げる。また、厚生労働省は、「求められる介護福祉士像」において「個別ケアの実践」「利用者の状態の変化に対応できる」「一人でも基本的な対応ができる」など「対応」「個別ケア」に関する項目を目標としているため、このような個別ケアにも着目したいと考える。よって本研究ではホームヘルパーの「自己成長感」に焦点をあて、適切なアセスメントと突発的な支援ができるという個別ケアの実践度との関連を確認することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

WAM-NET に登録されている A 市内の 600 名のホームヘルパーを対象とする自記式郵送調査を行った。調査期間は 2013 年 5 月で、有効回収数 149 通、有効回収率は 24.8% となった。調査項目であるホームヘルパーの「自己成長感」(3 項目)に関しては、「ヘルパー業務楽観的態度」尺度の下位概念を用いた。また、個別ケアに関しては、「ホームヘルパーの主體的で柔軟性のある個別ケア」を構成する下位概念のうち、「新たな気づきと突発的支援」(7 項目)を使用した。回答は、両尺度とも「とてもそう思う; 4 点」～「まったくそう思わない 1 点」の 4 件法で求め、程度が高いほど得点が高くなるように設定した。これらの尺度はそれぞれ、構造方程式モデリングを用いた確認的因子分析により、構成概念妥当

性が支持されている。

その他の調査項目としてホームヘルパーの属性及び特性として、性別、年齢、ヘルパー経験年数、仕事待遇への評価、仕事継続意識を測定した。分析方法として、両尺度の確証的因子分析を行った後、「新たな気づきと突発的支援」を独立変数、ホームヘルパーの「自己成長感」を従属変数とした因果関係モデルを構築した。さらに、ホームヘルパーの性別、年齢、ヘルパー経験年数、仕事待遇への評価、仕事継続意識を統制変数として投入し、WLSMVを推定法に構造方程式モデリングを用いて、モデルの適合度と各変数間の関係性を検討した。

3. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、調査対象者に調査の趣旨、データの匿名性、プライバシーの保護、研究目的以外でデータを使用しないこと、調査協力への自由意思の保障などを書面にて説明した。また本研究は、平成25年3月12日に大阪市立大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究結果

統計解析には、当該項目に欠損値のない131人（調査対象者の22.8%、回答者の87.9%）のデータを用いた。「自己成長感」3項目による1因子モデルを設定し、構造方程式モデリングを用いて構成概念妥当性について検討した。その結果 $\chi^2(df)=17.127(11)$, $RMSEA=0.000$, $CFI=1.000$ と統計学的な許容水準を満たし、 α 信頼性係数は0.870であった。次に「新たな気づきと突発的支援」7項目による1因子モデルを設定し、構造方程式モデリングを用いて構成概念妥当性について検討した。その結果、 $\chi^2(df)=15.351(12)$, $RMSEA=0.046$, $CFI=0.998$ と統計学的な許容水準を満たし、 α 信頼性係数は0.881であった。

また、「新たな気づきと突発的支援」が「自己成長感」を規定するとした因果関係モデルのデータに対する適合度は、 $\chi^2(df)=73.863(72)$, $RMSEA=0.014$, $CFI=0.999$ と統計学的な許容水準を満たしていた。また統制変数では仕事継続意識が「自己成長感 ($\beta=0.513$, $p<0.001$)」にヘルパーの経験年数が「新たな気づきと突発的支援 ($\beta=0.064$, $p<0.001$)」に有意な関係を示すことが確認された。

なお各潜在変数（内省変数）に対する説明率は、「自己成長感」が42.9%、「新たな気づきと突発的支援」が13.7%であった。

5. 考察

本研究で使用した尺度はクロンバック α から信頼性と、統計学的な水準を満たしていたことより、構成概念妥当性が支持された。また、「新たな気づきと突発的支援」は「自己成長感」と関連がみられた。従来の研究において「自己成長感」は、外的な影響を受けにくく、個人の生きる姿勢が規定する部分が多いと考えられていたが、ホームヘルパーの支援の中でも重要とされる個別ケアの実践である、正確なアセスメントを行い、予測のつかない展開にも対応するといったケア実践と関連していることが明らかになったといえる。

